



—秋田の名作を尋ねて—

生活綴り方 高井有一 『真実の学校』

北条 常久

(あきた文学資料館 名誉館長)

高井有一『真実の学校』（新潮社、昭和55年10月）は、「一章 夢の始まり」の次の一節から始まる。

昭和四年、九月に入って間もない日の夕方、この人物は、久保田城址の西縁の、北ノ丸新町にある滑川道夫の下宿に現れた。この日は朝からの曇り空で蒸暑かった。学級文集を作ろうと、謄写版の原紙を切っていた滑川は、下宿の内儀が取り次いだ成田忠久という名に聞き覚えがなかった。どんな人か、と訊き返すより先に、階段を軋ませて、成田は上って来た。

「紹介もなしに不調法だども、先生さ御苦労願いたい事あって来たす」

自分は今年の夏から、綴方の鑑賞教材用に、県内各地の児童の作品を集めた文集を発行しているのだが、それについて協力を頼みたいというのである。

「これだす。先ず見てたんへ」

と彼は、内隠しから極く薄い小冊子を取り出して、そっと畳の上に置いた。標題は「くさかご」であった。

「私一人の手仕事でやってるので、粗末ですが」

確かに見映えのするものではなかった。表紙も他の頁と同じ薄手の紙で、小さくカットが入れてあるに過ぎない。巻頭に、そこだけは淡紅

色の印刷で、「はじめの言葉」が掲げてある。それが「この『くさかご』はみなさんの心の鏡であります。何故でしょう。それは綴方はみなさんの心をうつしたものであるからです」と書き出されているのを見て、滑川は、眼の前に重たげに坐り、彼の手もとを注意深くみつめている人物の、心情の傾きが判ったような気がした。この人も、子供に甘やかな夢を託しているのか。「先生なば、お識合いも多いすべ」成田は丁寧に言った。文集の質を高め、ずっと続けて行くために、あなたやあなたの信頼する教師が指導する子供の作品を、掲載させてもらえないだろうか。また、各地の学校がこれを教材として購入するように、口利きをお願い出来ないだろうか。

「私なば、何とも事情に暗くて。師範の出ではないし、代用教員はやったども、辞めて大分になるし」

「ああ、いいす」滑川は頷いた。「私が役に立つようなば」

このようにして、「北方教育」と呼称された生活綴り方の雑誌「くさかご」が秋田の地からスタートしたのである。滑川は、この年の3月に、秋田師範学校の専攻科を卒業して、4月からは師範付属の明德小学校に勤務し、新任ながら国

語研究部の綴方主任であった。若くして嘱望されていたのであろう。成田もそれを知って滑川を訪ねてきたはずである。

しかし、一方、協力するという返事をしながらも、滑川は成田の職業も学歴も知らなかった。作者高井は、成田を次のように紹介する。

成田が月俸三十八円の代用教員として、浜口村浜田尋常高等小学校に着任したのは、大正十年二月。

浜口村は八郎潟の北端の寒村で、貧しい家にとって子供は欠かせない労働力である。彼等は磯なまぐさの腥さをそのまま学校の教室に持ち込んで来た。成田はそんな教室に、生徒重視の自由教育とグループ学習を持ち込んだ。

教育熱心であったが、成田は複雑な家庭を抱えていて生活のために代用教員を止めて、秋田市で豆腐屋を開業した。しかし、知人から北海道庁の教材用児童文集の発刊の話聞き、自分も秋田の子供たちのために教材用児童文集を刊行しようと決意したのである。小学校の全教科には必ず国定の教科書があったが、綴方だけが教科書がなかった。滑川道夫の協力を得て「くさかご」は順調に発行を続けた。

高井有一『真実の学校』は、「二章 青年教師」で貧しい少年たちのために立ち上がる青年教師群像が語られ、「三章 子供の日々」では、教師とともに生き生きと活動する子供たちが語られ、「四章 日暮の汽笛」では、秋田の子供の作品が評判になり北方教育と呼称され日本の綴方教育をリードする様が語られる。ここにその例を一つ提示する。

南秋田郡金足西小学校の伊藤重次（小4）少

年の詩は特に知られる。

きてき

あのきてき
たんぼに聞えただろう
もうあばが帰るよ
八重蔵
泣くなよ

「八重蔵 泣くなよ」と小学生の兄が背中の幼い弟をあやす。しかしろくに乳も与えられていない弟はただ泣くばかりである。日暮になって、列車が汽笛を鳴らして通る。母も早く田から上がって子を抱きしめたいだろう。いや、一番腹を減らしているのは兄かもしれない。貧しいがうるわしい家族愛の詩である。

北方教育の教師達は、子供たちに「感じたことを有りのままに書け、それによって自分達の生活を見つめる眼が育つ」と教えた。それは、暗い現実の生活の中を生き抜く力を育てようとするものである。しかし、それは同時代の「赤い鳥」と比べて貧乏綴方と言われ、貧しい一面ばかりを賞める一面的指導と視学や校長から批判された。「五章 生活台」では、北方教育集団の生活を見つめる眼が理論化され、「六章 苦闘」、「七章 強いられた死」ではそれを教育の場で貫く苦闘が語られる。戦争へ向かう国策と生活重視の真実の教育とのせめぎあいである。しかし、「八章 鎮魂」では、成田忠久は戦後の生活綴方の復活を見て彼岸に旅立つ。

高井有一『真実の学校』は、戦前、戦中の貧しい不幸な時代を生き抜いた生徒と教師の物語で、不穏な今日をかみしめて読みたい作品である。
※編集部注：一部旧表記は現代表記に改めています。